

非対格性制約と結果構文の習得研究： その問題点と意味的 / 機能的説明

松 林 城 弘

1. はじめに

次の(1)の日本語では、主語指示物の行為や事象と、それに伴って起こる結果状態が一文で述べられている。

- (1) a. 太郎は花瓶を粉々に壊した
b. 池がかちかちに凍った

(1a)では、主語指示物「太郎」の「花瓶を壊す」という行為と、その結果として「花瓶が粉々になった」という状態が併せて述べられている。また(1b)では、主語指示物の「池」そのものが「凍る」ことにより、結果として「池がかちかちになった」という最終状態が述べられている。これらは、いわゆる結果構文 (Resultative Construction) と言われる文で、次の(2)のように、英語にも同じような構文が存在する。

- (2) a. John broke the cup into pieces. (ジョンはコップを粉々に壊した)
b. The icecream froze solid. (アイスクリームはかちかちに凍った)

ところが、次の(3)の日英語が示すように、表層構造においては(1)(2)の文に類似しているにもかかわらず、結果構文としては不適格となる文が存在する(但し、(3a)は「疲れた状態で」と解釈すれば文法的になる)。

- (3) a. *Mary danced tired.
b. *花子はくたくたに踊った。

(1)や(2)の日英語が結果構文として適格なのに、何故(3)の文が不適格なのであろうか。この問題を巡っては過去に様々な提案がなされてきた。その中の一つに、文中に現れる動詞が非対格動詞 (unaccusative verb) であるか非能格動詞 (unergative verb) であるかによって適格性に違いがでてくると説明するアプローチ (Miyagawa 1989, Levin and Rappaport Hovav 1995) がある。

本論では、まず、このアプローチに従って、結果構文がどのような制約の基で適格となり、また、不適格となると提案されているのか、さらに、このような制約が、第2言語の習得研究 (Hirakawa 1997, 2003) においてはどのように取り扱われているのか、という2点について概観する。次いで、こうした非対格 / 非能格動詞の区別を前提とする説明に対して、意味的 / 機

能的な側面から異議を唱えるアプローチ(高見1997, 高見・久野2002)を取り上げながら, 結果構文の適格性は非対格/非能格動詞の区別のみで左右される事象ではないことを見ていく。最後に, この意味的/機能的な説明が, 第2言語における結果構文の習得を説明する場合にも有効であるかどうかという点に関して, パイロットテスト¹⁾の結果を通じて考察する。

2. 非対格性制約と結果構文の習得

動詞の統語的及び意味的特性に応じて, 非対格動詞と非能格動詞に分類した上で, 各々の動詞は結果構文の適格性に深く関わっているとする説(Miyagawa 1989, Levin and Rappaport Hovav 1995を参照)がある。本節では, まず, この説の概要を見た後, 第2言語の習得研究(Hirakawa 1997, 2003)において, この説がどのように取り込まれているか概観する。

2.1 非対格性制約

まず始めに, 非能格動詞と非対格動詞の区別の基準となる統語的な違いについて, 各々の動詞を含む(4)と(5)のD構造とS構造を見ながら確認しておきたい。

(4) 非能格動詞 (jump)

D構造: [Children [_{vp} jumped]] → S構造: Children jumped.

(5) 非対格動詞 (break)

D構造: [e [_{vp} broke the tree]] → S構造: The tree broke.

(4)が示すように, 非能格動詞が現れる統語構造は, D構造においてもS構造においても, いわゆる主語の位置に変化はなく, 常に同じNP (Children) が主語の位置に存在する。他方, (5)の非対格動詞の文では, D構造においては主語の位置が空になっているが, S構造への派生の際に, 目的語の位置からNP (the tree) が移動して, 主語の位置が満たされている。つまり, 元々目的語の位置に生成されたNPが, 統語的な移動変形により主語の位置に移動したと仮定される訳である。こうしたD構造からS構造への派生の仕方の違いが, 非能格動詞と非対格動詞を区別する統語的な違いの根拠となっている。

次に, 非能格動詞と非対格動詞を区別する意味的な違いについて, 下の(6)と(7)を例に取りながら簡単に確認しておきたい。

(6) 非能格動詞 (jump, sleep)

a. Children jumped on the floor.

〈Agent〉

b. One of the students slept in class.

〈Experiencer〉

(7) 非対格動詞 (fall, break)

a. My watch fell on the floor.

〈Theme〉

b. *The tree broke easily.*

〈Theme〉

(6a)の動詞 *jump* は、主語の意図的な行為・動作を表しており、また、(6b)の *sleep* は、主語の生理的な現象を表している。非能格動詞とは、(6a)のように、動作主 (Agent) の意図的な行為・動作を表したり、(6b)のように、経験者 (Experiencer) の生理的な活動などを表す動詞であるとされている。一方、非対格動詞とは、(7a, b)の *my watch* や *the tree* のような対象物 (Theme) を主語に取り、その対象物の非意図的 (自然発生的) な位置や状態の変化を表す動詞であるとされている。先程述べた動詞の統語的な特性に加えて、動詞が主語の意図的な行為・動作、又は、生理的な活動を表すか、それとも、主語の非意図的な位置や状態変化を表すか、といった意味的な側面からも、非能格動詞と非対格動詞が区別されている。

このように統語的及び意味的に分類された非能格動詞と非対格動詞は、結果構文という統語構造と深く関わっているとする説がある。Levin and Rappaport Hovav (1995), Miyagawa (1989), Tujimura (1990a, b) 達は、日英語の結果構文の中に、非能格動詞が現れた場合と、非対格動詞が現れた場合とでは適格性に大きな差が生じるとして、結果構文の成立には非能格 / 非対格動詞の区別が深く関わっていると主張してきた。例えば、下の (8) (9) のような例文 (Tujimura 1990a: 280, 281) を使いながら、その関わりが説明されている。

- (8) a. *The ice cream froze solid.*
 b. *The butter melt to a liquid.*
 c. *The vase broke into little pieces.*
- (9) a. **I danced tired.*
 b. **I laughed tired.*
 c. **I walked tired.*

(8a)は「アイスクリームがカチカチに凍った」という意味で、(8b)は「バターが液状に溶けた」という意味になり、(8c)は「花瓶が粉々に壊れた」という意味を表している。いずれの文も、主語となっている対象物 (Theme) の最終結果状態を表しており、結果構文としては極めて適格な文である。一方、(9a-c)は「私はくたくたに踊った / 笑った / 歩いた」という意味になり、主語の動作主 (Agent) の結果状態を表しておらず、不適格な文となっている。

また、日本語においても、(10)の例文 (Miyagawa 1989: 99, Tujimura 1990a: 934) が示すように、結果述語が対象物の結果状態を適格に表す場合もあれば、(11)のように、結果述語が動作主の結果状態を適切に表さない場合もある。

- (10) a. パンが真っ黒に焦げた。
 b. 花子の髪が長く伸びた。
 c. 飴がべたべたに溶けた。
- (11) a. *私はくたくたに泳いだ / 遊んだ / 笑った。

(8)から(11)の日英語の例文からも判るように、非対格動詞が現れる文は全て適格であり、逆に、非能格動詞が現れる文は全て不適格な文と見なされている。高見・久野 (2002: 362) は、こうした Levin and Rappaport Hovav, Miyagawa, Tujimura 達の提案の主旨を(12)の制約として

については、容認の程度に有意な差 (*: $p < 0.01$) があるものの、適格な文として判断していることが判る。一方、非能格動詞が現れる構文については、両者とも容認されないと判断している。このような結果から、英語母語話者ほどではないが、学習者においても、「結果構文には、非対格動詞と他動詞のみ現れ、非能格動詞は現れない」とする語彙的・統語的知識が備わっており、(12)の非対格性制約は、学習者の結果構文の習得を説明する場合にも、有効な制約であると結論づけられている。

3. 意味的 / 機能的制約と結果構文の習得

前節では、非対格性制約の概要とその制約が第2言語の習得研究にどのように取り入れられているか、簡単に見てきた。本節では、まず、高見 (1997)、高見・久野 (2002) に従って、意味的・機能的観点から、非対格性制約の問題点を探り、結果として、その制約に依拠した第2言語習得研究の不備を指摘する。最後に、この意味的・機能的な説明が、第2言語における結果構文の習得を説明する場合にも、適用可能かどうか、パイロットテストの結果を通じて考察する。

3.1 意味的 / 機能的制約

高見・久野 (2002: 380) は、日本語と英語の結果構文の成立には、(15)の意味的 / 機能的制約が課せられるとしている。

- (15) 日英語の結果構文に課せられる意味的 / 機能的制約：日英語の結果構文は、結果述語で示されている状態変化が、動詞の意味から予測されうる場合に、適格となる。

高見 (1997: 28-31) は、次の例文とその例文中に現れる動詞の意味を提示しながら、この制約の妥当性について説明している。

- (16) a. The boy broke the vase to pieces.
 break: to (cause to) separate into parts suddenly or violently
 b. Mary tinted her hair blonde.
 tint: to give a slight or delicate colour to (the hair)
 c. The pond froze solid.
 freeze: to become solid at a very low temperature
 d. The butter melted to a liquid.
 melt: (of a solid) to become liquid
- (17) a.*John loves Mary happy.
 love: to feel love, desire, or strong friendship (for)
 b.*The man touched the dog angry.
 touch: to feel with a part of the body, especially the hands or fingers
 c.*The guests arrived sick.
 arrive: to reach a place, especially the end of a journey

d.*John came to my house breathless.

come: to move towards the speaker or a particular place

(16)の各文に現れる動詞は、下線部で示してあるように、結果述語の意味を内在的に持っている。例えば、(16a)は、「少年が花瓶を壊した」結果として、「花瓶が粉々になった」という花瓶の最終状態が述べられた文であるが、'break'という動詞が'into parts'という結果述語の意味を内包しており、そのため、制約(15)を満たし、適格な結果構文となるわけである。(16b-d)についても同様のことが言える。一方、(17)の各文に現れる動詞は、結果述語の意味を内包しておらず、そのため、(15)に従い不適格となる。例えば、(17a)では、'love'とう動詞は、'happy'という結果述語の意味を含意しておらず、「ジョンがメアリーを愛している」結果として、「メアリーが幸せになる」とは限らない訳で、結果構文としては容認されない。(17b-d)の各文についても同様のことが言える。見てきたように、制約(15)に従えば、動詞の意味が、結果述語で示される変化状態を含意する場合のみ、結果構文として成立することになる(影山1996第5章も参照)。

さらに、高見・久野(2002)は、「結果構文には、非対格動詞と他動詞のみに現れ、非能格動詞は現れない・・・」という、非対格性制約は間違いであるとし、(15)の意味的/機能的制約の方が、結果構文の適格性をより包括的に捉えることができるとしている。(18)の各文(久野・高見2002:367,369)は、非対格動詞が現れても不適格となる文で、(19)の各文(久野・高見2002:382,383)は、非能格動詞が現れても適格となる文である。

- (18) a.*The general died famous.
 b.*Mary slipped on the ice unconscious.
 c.*チョムスキーの本が有名にでた。
 d.*地震で花瓶が棚から粉々に落ちた。
- (19) a. John ran into the room.
 b. John moved closer to the window.
 c. 子供たちは、丸く輪になった。
 d. 湿度が高いせいか、ベチョベチョに汗をかいた。

(18)の各文に現れる動詞'die', 'slip', 「でる」, 「落ちる」は、主語の非意図的な位置や状態変化を表している非対格動詞であるにも拘わらず、いずれの文も、非対格性制約に反して不適格となっている。一方、(19)の各文には、主語の意図的な行為か生理現象を表す非能格動詞が現れているが、非対格性制約に反して適格な文となっている。いずれの文の適格性も、非対格性制約のみでは説明できないことになる。

非対格性制約の規定では水漏れしてしまう事象も、意味的/機能的制約に基づけば、適切な説明が可能となる。例えば、(18a)の'die'は、主語指示物(将軍)の「死ぬ」という非意図的な状態を表すが、その結果として、結果述語で述べられている「有名になる」という状態変化は含意しない。そのため、(15)の意味的/機能的制約に反して不適格となる。(18b-d)についても同様の説明が成り立つ。他方、(19a)の動詞'run'は、主語指示物(ジョン)の「走る」という意図的な場所の移動を表し、その結果として、結果述語に「部屋」のような移動先を必要とする。そのため、意味的/機能的制約を満たし、適格な文となる。(19b-d)についても同様の説明ができる。このように、(15)の意味的/機能的制約は、非対格性制約が見誤る(18)や(19)の各文

の適格性も、より適正に捉えることができる。以上のような考察から、結果構文の適格性を説明するには、非対格 / 非能格動詞の区別を前提とした非対格性制約のみでは不十分であり、意味や機能を視野に入れた、より幅広い説明が必要不可欠となると考えられる。言い換えると、結果構文の適格性は、非能格か非対格かという動詞の語彙的情報にのみ依存する事象ではなく、「・・・結果述語で示されている状態変化が、動詞の意味から予測される場合に、適格となる」という意味的 / 機能的な制約に依存する事象であると結論づけられる。

3.2 意味的 / 機能的制約と第 2 言語の習得

前節で見たように、結果構文の成立を説明するのに、非対格性制約が必ずしも適さないということになれば、この制約を前提とした第 2 言語習得研究にも深刻な影響を及ぼすことになる。2.2 で概観したように、非対格性制約に依拠した第 2 言語習得研究においては、学習者は、英語母語話者と同じように、「結果構文には、非対格動詞と他動詞のみに現れ、非能格動詞は現れない」という語彙的・統語的知識を持っているのではないかと結論づけられている。一方、高見・久野の提案では、結果構文の適格性は、非能格か非対格かという動詞の語彙的情報にのみ依存する現象ではなく、意味的 / 機能的制約に大きく依存する現象であると位置づけられている。もしこの位置付けが正しければ、第 2 言語における結果構文の習得を説明する場合にも、非対格性制約に代わって、意味的 / 機能的な制約が、重要な役割を果たすことになる。本節では、意味的 / 機能的制約が、どの程度、第 2 言語学習者の結果構文の習得に関与するのか、その可能性について、大学生を対象としたパイロットテストを通じて探してみたい。

実験文としては、Hirakawa (1997, 2003) の実験で使用された 15 文に、新たに 5 文を付け加えた合計 20 文が使用されたが、そのうち特に、本パイロットテストの目的に関連する実験文を、(20)-(24) に示しておく。(20)-(24) の各 a 文は、Hirakawa の実験で使用された文で、各 b 文は、今回新たに付け加えられた文である。被験者には、各 a, b 文の太字で示した文の適格性判断を求めた。

- (20) a. John dropped the vase on the floor by mistake.
The vase broke into pieces.
 b. John dropped the vase on the floor by mistake.
 *The vase broke worthless.
- (21) a. I left the butter on the table one summer day.
The butter melted to liquid.
 b. I left the butter on the table one summer day.
 *The butter melted small.
- (22) a. Mary had set the temperature of the oven too high.
The cake burned black.
 b. Mary had set the temperature of the oven too high.
 *The cake burned tasty.
- (23) a. Susan didn't have her hair cut for 6 months.
Her hair grew long.
 b. Susan didn't have her hair cut for 6 months
 *Her hair grew wavy.

(24) a. We had a very cold winter.

The river froze solid.

b. We had a very cold winter.

***The river froze blue.**

問題となる文は、全て、非対格動詞と結果述語が現れる典型的な結果構文の語順となっている。2.1及3.1節で見てきたように、各a文は、非対格性制約の面からも、意味的/機能的制約の面からも、極めて適格な結果構文であると判断できる。一方、各b文に関しては、結果構文としては容認されない文であると判断できるが、その根拠については、非対格性制約よりも、意味的/機能的制約に求めた方がより明確な説明が得られる。例えば、(20b)の場合、意味的/機能的制約に従うならば、'break'という動詞は、'into parts'という結果述語の意味を内包しているが、'worthless'という意味は含意しておらず、そのため、「花瓶が壊れた」結果として、「価値のないものになった」という花瓶の最終状態を述べることができず、結果構文としては不適格となる。他方、非対格性制約では、「結果構文には、非対格動詞と他動詞のみに現れ、非能格動詞は現れない・・・」と規定するだけで、意味的/機能的説明ほど、(20b)の不適格性を明確に説明できないし、むしろ、間違った適格性判断につながる可能性すらある。同様の説明が、(21)-(24)の各b文についても成り立つ。

被験者は、先程も述べたように、各a, b文の太字で示した文の適格性を判断する訳であるが、上記のことを踏まえて考えると、被験者が、もし意味的/機能的な制約に敏感であるならば、各a文を適格と判断し、各b文を不適格と判断すると予測される。しかしながら、もし各a, b文の適格性判断にそのような差が生じない場合には、被験者は、意味的/機能的制約の影響は受けないことになり、この制約が学習者の結果構文の習得を説明するのに妥当かどうか問題となる。述べてきたことを踏まえて、次の仮説を立てる。

(25) 被験者は、意味的/機能的制約に敏感であり、「動詞の意味が、結果述語で示される状態変化を内包している場合のみ、結果構文として適格である」と判断する。

パイロットテストには、岩手大学の国際文化課程に在籍する2年から4年の学生52名が参加した。使用した実験文は、非対格動詞が現れる文が10文、非能格動詞が現れる文が5文、他動詞が現れる文が5文で、合計20文である(補遺参照)。特に、仮説(25)と直接関係する文は、先程確認した(20)-(24)の非対格動詞を含む10文である。実験手法としては、下の(26)に示すように、実験文の右横に、-2(極めて不適切)から2(極めて適切)までの5個のメモリが設定されたスケールがあり、被験者は、どれか一つのメモリを選び、数字に○印をつけるという方法で行われた。

(26) We had a very cold winter.

The river froze solid.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

下の表は、(20)–(24)の各文において、被験者が選んだメモリの平均数値である。

20a	20b	21a	21b	22a	22b	23a	23b	24a	24b
0.21*	-0.46*	0.65*	-0.35*	0.83*	-0.35*	0.81*	-0.29*	-0.71	-0.96

表27が示すように、各a文は、24aを除いて、プラスの数値を示しているが、各b文に関しては、全て、マイナスの数値を示している。また、各a文とb文の差は、24aと24bの差を除いて、統計的に有意な差である(*: $p < 0.01$)。この結果を見る限り、被験者は、文中に現れる動詞の意味が、結果述語で示される状態変化を内包している文(20a, 21a, 22a, 23a, 24a)については、概ね、適格と判断し(24aは除く)、内包していない文(20b, 21b, 22b, 23b, 24b)については、不適格と見なしていることが判る。

こうした結果を受けて、仮説(28)は、概ね、支持されたものと判断でき、被験者は、意味的 / 機能的な制約に敏感であると言ってもよいであろう。本節の冒頭でも述べたが、高見・久野は、結果構文の適格性は、非能格か非対格かという動詞の語彙的情報にのみ依存する現象ではなく、意味的 / 機能的制約に大きく依存する現象であるとしている。今回のパイロットテストの結果から、この制約が、日本人学習者の結果構文の習得を説明する場合にも有効であるということが判る。そして結論として、第2言語における結果構文の習得には、非対格性制約のみを使って説明するよりも、むしろ、意味的 / 機能的な概念を使う方が、より包括的で、説得力のある説明ができるのではないかと、ということが言えそうである。

4. おわりに

本論で焦点を当ててきた意味的 / 機能的制約は、機能的統語論の分野で議論されてきた概念であるが、この分野では、過去に幾つもの言語事象を分析し、それら事象に作用する意味的 / 機能的制約を提案してきた(Kuno 1987, Takami 1992, Kuno and Takami 1993, Takami 1998を参照)。その中には、擬似受動文の適格性や、本論で取り上げた結果構文の適格性に関する意味的 / 機能的説明がある。

そうした擬似受動文や結果構文の説明を基盤に据え、松林(2003)では、第2言語における擬似受動文の習得に関して、次の2点を確認した。①擬似受動文の適格性は、非能格か非対格かという動詞の語彙的情報にのみ依存する現象ではなく、インヴォルヴメントや特徴づけといった機能的な概念に依存する事象であるということ。②こうした機能的な概念は、第2言語学習者の擬似受動文の習得を説明する場合にも有効であるということ。次いで、本論では、結果構文に関して、次の2点を確認した。①結果構文の適格性は、非能格か非対格かという動詞の語彙的情報にのみ依存する事象ではなく、「・・・結果述語で示されている状態変化が、動詞の意味から予測されうる場合に、適格となる」という意味的 / 機能的な制約に依存する事象であるということ。②こうした機能的な概念は、第2言語学習者の結果構文の習得を説明する場合にも有効であるということ。

擬似受動文と結果構文に関するそのような確認事項から、少なくとも、機能的統語論は、ことばを分析しようとする際の、極めて効果的な手法を提供するだけでなく、言語習得、とり

わけ、第2言語習得の分野においても、有効な説明手段となり得る可能性を秘めていると言って差し支えはないであろう。実際に、その機能的統語論の説明能力の一端は、本論で見えてきたように、①非対格性制約の不備を指摘し、その代案を提起したり、また、②非対格性制約に依拠した第2言語習得研究の不備を指摘し、意味的/機能的な側面から代替案を提案する過程で、象徴的に現れていると言える。

注

- 1) 今回の実験では、非対格動詞が現れる結果構文については、ある程度分析できたものの、非能格動詞と他動詞が現れる場合については、分析できなかった。その意味で、パイロットテストという位置づけであり、今後さらに実験を重ねる中で、機能的な概念と結果構文の習得との関係について、全体像を明らかにしていくことが求められる。

参考文献

- Hirakawa, M. 1997. On the Unaccusative/Unergative Distinction in SLA. *Jacet Bulletin* 29, 17-27.
- Hirakawa, M. 2003. *Unaccusativity in Second Language Japanese and English*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』東京: 大修館
- Kuno, S. 1987. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kuno, S. and K. Takami. 1993. *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, B. and Rappaport Hovav, M. 1995. *Unaccusativity: at the Syntax-lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 松林城弘. 2003. 「非能格性制約と擬似受動文の習得研究: その問題点と機能的説明」『アルテスリベラレス』73: 39-46.
- Miyagawa, S. 1989a. *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.
- Miyagawa, S. 1989b. Light Verbs and the Ergative Hypothesis. *Linguistic Inquiry* 20, 659-688.
- Takami, K. 1992. *Preposition Stranding: From Syntactic to Functional Analyses*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Takami, K. 1998. A Functional Constraint on Extraposition From NP. in A. Kamio and K. Takami (eds.) *Function and Structure*, 23-56. Amsterdam: John Benjamins.
- 高見健一・久野日章. 2002. 『日英語の自動詞構文』東京: 研究社
- Tsujimura, N. 1990a. The Unaccusative Hypothesis and Noun Classification, *Linguistics* 28, 929-957.
- Tsujimura, N. 1990b. Ergativity of Nouns and Case Assignment, *Linguistic Inquiry* 21, 277-287.

補遺

(テスト指示文及びテスト文)

次の1～20の各文を読み、スケール左横の英文が意味的に適切かどうか判断してください。スケールには-2（極めて不適切）から2（極めて適切）までの5個のメモリがありますので、どれか一つを選び数字に○印をつけてください。

1. The comedian was telling us a funny story.

The audience laughed helpless.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

2. Susan didn't have her hair cut for 6 months

Her hair grew wavy.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

3. We had a very cold winter.

The river froze solid.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

4. The children were in the playground all day.

They played black.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

5. Susan decided to make a ring.

She hit the metal flat with a hammer.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

6. John dropped the vase on the floor by mistake.

The vase broke into pieces.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

7. John's favorite color was yellow.

He painted his car yellow.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

8. I left the butter on the table one summer day.

The butter melted small.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

9. Mary went to a disco and stayed there all night.

She danced tired.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

10. We had a very cold winter.

The river froze blue.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

11. The child was playing with his blocks.

He built the blocks into a tower.

- 2	- 1	0	1	2
(極めて不適切)	(やや不適切)	(どちらとも言えない)	(やや適切)	(極めて適切)

12. Mary had set the temperature of the oven too high.

The cake burned flat.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

13. Susan didn't have her hair cut for 6 months.

Her hair grew long.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

14. The boy went to the beach and stayed in the water for one hour.

He swam cold.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

15. The rope was too long.

So I cut the rope in two.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

16. I left the butter on the table one summer day.

The butter melted to liquid.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

17. John dropped the vase on the floor by mistake.

The vase broke worthless.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

18. Mary used a new soap for washing.

She washed the shirt clean.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

19. Mary was at the Karaoke party for hours.

She sang hoarse.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)

20. Mary had set the temperature of the oven too high.

The cake burned black.

-2 -1 0 1 2

(極めて不適切) (やや不適切) (どちらとも言えない) (やや適切) (極めて適切)